交響詩篇エウレカセブン～AnotherLovers～

ぅーの

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

セカンドサマーオブラブから１８年。

ピーキーカスタムされたオフロードバイクに乗る青年、ユーリ、１８歳。

彼のストーリー。

目次

エウレカセブンＡＬ　旅編
エウレカセブンＡＬ　1
旅　5
あの日＆ａｍｐ；ベルフォレスト　11
白い記憶　21
エントランス・オブ・ジ・アース＆ａｍｐ；地球層第３都市　25
旅の終点　31
エウレカセブンＡＬ　過去編
０１　49

エウレカセブンＡＬ　旅編

エウレカセブンＡＬ

世界を巻き込んだセカンド・サマーオブラブ。
それから１８年経った現在。
海岸沿い、スカブの上にできた高速道路をピーキーに改造されたオフロードバイクで走る灰色の短髪の青年。
彼の名前はユーリ。
彼には急いで行かなければいけない理由があった。
このスカブに覆われた惑星のスカブの上から下の地球層にある目的地を目指す。
ただ伝えたい。
大切な人に。
伝えなければならなかった。
実際には大切だったはずの人ではあるが。
そろそろ日が暮れる時間、地平線の向こうでは日が沈もうとしていた。
ちょうど目の前に町が見え、今夜の宿を探す。

この旅を始め、すでに一週間は過ぎた。
制限時間はスタートからおよそ2ヶ月。
目的の地球層へは、「地球行きリフト」へ行く必要があった。
そこはちょうどこの旅の中間地点で、つまりは1ヶ月でそこまで行かないといけない必要があった。
幸運なことに、なにも起きないまま旅は順調に進んだ。
このままいけば、二週間後にはベルフォレストに着き、知り合いの家に泊まれることになる。
そうこうしているうちに日は暮れていた。
安そうな宿を見つけ、バイクを留める。
フロントに声をかける。
「一泊だけなんですが、部屋は空いてますか?」
「空いてます。夕食、朝食はどう致しますか?」
「無しで」
「わかりました。４０００円になります。こちらの鍵をどうぞ。」
夕食、朝食を近くのスーパーで調達し、ホテルへ戻る。

部屋に戻り、風呂場で今日一日（実際には野宿を挟むので二日目）の汚れを落とす。
夕食を食べ、明日の旅路を確認し、明日に向けて眠りに入る。
いつしかこれが彼の日常へと変わっていた。

朝、まだ朝日が昇り切らない時間に起き、身支度を済ませ、鍵をフロントに返し、バイクに乗ってさっさと町を出て行く。

次の町へ。

次の町へ着くまでに三日かかった。
しかし、これもまだ順調どころか、少し早めに着きそうな具合だった。

ついた町は少し荒んだ感じの町ではあったが、至る所に交番があり、まだ安全そうではあった。
交差点の信号で止まる。
人も車も全く通らないので、つい進みそうになるところ、１人のロフストランド杖をついている女性が通った。
ドサっと石につまづいたのか、こけたので、助けに行く。
「あっ！大丈夫ですか?!」
女性はゆっくりこっちを見上げ、こちらを見上げる所々に包帯を巻いていた。
怪我人のようだった。
「ご、ごめんなさい、、、ありがと、、、、、、ユーリ?」
「え、、?」

続く。

旅

「あー！やっぱりユーリだ！ちょっと顔変わったけど！」
「えー、、人違い、、」
「ずっと連絡もなにもしないで！心配してたんだよ!?」
「いや、、あの、、、」

（つ、、連れてこられてしまった、、）
あのあと強引に女性の家と思われる建物まで引っ張られ今に至る。
「こんなところで会うなんて、偶然ってあるものねー。はいお茶。」
「あ、ありがとう、、ございます。」
もちろん彼女には面識はない。顔と名前がそっくりな人と間違えているのだろう、と彼は思っていた。
「で、バイクに乗ってなにしてたのよ。あれ？自分探しの旅ってやつ？」
「まぁ、そんな感じです。」
「それにしても懐かしいわね。もう他のメンバーとは連絡取れてないのよ。ずーっと。」

「へ、へぇ、、それは、、心配ですね、、」
「うん。ダイスケも、全然。噂にすら聞かないのよ。リフうまいのにさ。何もなきゃいいんだけど、、」
　知らない人が知らない人を心配している。それを見て、なにをすればわからなかった。
　何か提案できることがあったのか、いや、おそらくないだろう。
　彼にできることはなにもなかった。
「あ、そうだ。旅してるのよね？他のメンバー全員とは言わないからさ、ダイスケ見かけたら連絡渡すように行ってくれない？」
「え!?、、、わ、、、わかりました。」
「ごめんね。あたし、こんな足だからさ。」
　補助器具のようなものを付けた足を見せる。
　たしかに、この足で長い旅をするのは無理があるだろう。
「あ、そーだ！シーロン達は元気にしてる？怪我とか病気とかしてなきゃいいんだけど、、？」
（リュール、、？誰だそれ、、俺といること前提なのか、、、？）
「元気、、だと思いますよ、、。」

思わずついた嘘に心が締め付けられた感覚があった。
「そっかぁ、、よかった。」
彼女の安心した顔でますます心を締め付けられた。できることなら、さっさとここから出て行きたかった。
「じゃあ俺、ここら辺で、、」
「え？どっか止まる先あるの？」
「いえ、ホテルに。」
「じゃあ泊まっていきなさい。そこの部屋空いてるから。」
「いや、大丈夫で、、」
「いいからいいから！久しぶりに昔話でもしましょ！」

そのあと、ご飯を作ってもらい、食べながらよくわからない昔話を聞かされ、クタクタに疲れ果て、寝床へついた。
ちなみに彼女の名前はツーリカというらしい。
冷蔵庫に貼ってあった証明証のようなものから判明した。

次の日の朝。

この日はなぜか寝坊をし、ちゃっかりツーリカに朝食をもらってしまった。
出発の準備をし、バイクに跨った。
ツーリカが見送りに来てくれた。
「行っちゃうのね。また寂しくなるわ。」
「すみません。先を、、、急いでるんで。」
「そっか、、、じゃあ気をつけてね！」
「はい。」
見えなくなるまでずっと手を振ってくれていた。
誰とも知らないはずの自分に、、、

次の町へ着いた。
時期も時期なのか、雪が降る町だった。
ここら辺までになるとついに海岸は見えなくなった。
「この町、宿がない、、、」
これは重大だった。
前の町から4日経っていた。

つまりこれで、次の町まで一週間以上野宿確定なのだ。
流石に疲労が多い。
元々、それなりに金持ちのボンボンなので、それに対してのこの仕打ちはかなり効く。
しかも、今は軽く雪が降っている程度ではあるが、夜になるとどうなるかわかったのではない。
しかし、いくら探しても宿らしい宿はなく、仕方なく屋根のついた駐車場にバイクを置き、毛布等の防寒具を取り出した。
「くそぅ、、、もうちょっと計画して行くべきだったな、、」
野宿で寝ている間に盗難にあうことは珍しくない。
といっても、金銭は基本的に銀行に入っており、あるのは通帳だが取られないよう、バイクのシートの裏側が開くように改造してあり、そこに入れてある。
一番心配なのは父親の形見であるリフボードだった。
これは隠しようがないので、抱いて寝るしかない。
「リフ、、してねぇなぁ」
ずっと旅続きでリフをする余裕なんてなかった。
というか、この先旅の中ですることはないだろう。
ふと、リフボードを裏向けてみると、電池ケースの蓋のようなものが付いていた。

開けると、そこには「大切なあの子」の写真が入っていた。
「誰だよ、、こんな大切なもんこんなとこに入れてんのは、、、、俺か。まぁ俺しかいないな。」
写真を見つめる。そして、つい思い出してしまう。あの子の悲鳴。
『あんたなんか、、、ユーリじゃない！』
この旅の中、目を閉じれば頭の中で響く。
彼を否定された。いや、彼の存在を否定された叫び声。
「何を言われようとも、、、ただ俺は、君に伝えたいだけなんだ。」
意思を込め、目を瞑る。
今の彼には、現実から逃げるしか術は何もなかった。

続く

あの日&ベルフォレスト

『ユーリの真似しないで！』
なんで俺を否定するんだよ、、
『こんなのいらない！』
渡した花を投げ返される。
なんで、、
『あんたなんか、、、ユーリじゃない！』
なんで俺は何も覚えてなかったんだよ！
俺だってもう、、、こんなの、、、いやだ、、、
ただただ俺の胸を締め付ける。
彼女の悲しみと憎悪に溢れた目が、、、

藤色の目が

「あ、、」

屋根付き駐車場の小さな窓から日が射して、朝と認識する。

防寒具のお陰で寒くはないが、眠る姿勢が姿勢なので、身体中が痛む。

駐車場を出ると、外は晴れ、昨日見えなかったが、ここから近いところに銭湯が見えた。

銭湯へ行き、汚れを落とし出発に備えて身支度と朝食を済ませる。

「行くか。」

次の町へ行く途中、前の町から2日が立った日。
道路を走っていると、大きな看板を貼っつけたトラックが横を通っていった。
看板には
『人型コーラリアン救出、および解放のために人材を集めています。ご協力ください。』
と書いてあった。
人型コーラリアンは、セカンド・サマーオブラブの後、頻繁にスカブから発見されるようになった。
ある者はふつうに人々と暮らしたりしていたのだが、ある者は『反共生派』の国の軍に捕まり、実験台にされるなどされた。
このコーラリアンとの『共生派』、『反共生派』の対立は険しく、世界がこれで2つに分かれた。
戦争が起こったりはしたが、1年ほど前に共生派の勝利がほぼ確定し、事態は治まりつつあった。
しかし、未だに研究と称し、コーラリアンを拉致監禁する輩も多く、その解放を目的として、『イズモ財閥』からさっきのようなグループが出現している。
「コーラリアン、、か。」

あの子のことを思い出す。
あの子の持っていた、藤色の瞳を。

次の日、町へ着いた。
今度はちゃんと宿もあり、そこへ泊まることにした。
いつもと変わらず、次の出発の準備をし、眠りにつく。
朝起きれば、支度を済ませて出発する。
次の次の町でベルフォレスト着く。
何もかもが予定どうりだった。
そしてバイクを走らせた。
あの子の元へ。

セイレンの元へ！

続く

スカブによってできた渓谷を走り続け、ちょうど日が真上の時間に着いた。
ベルフォレスト。
季節が季節なので、雪化粧をまとっていた。
見る限り、普通の田舎町、と言った風景ではあった。
しかし、町に入って見るや否や、道路沿いには『英雄、アドロックとレントン親子の生まれ故郷、ベルフォレスト!』と記載された旗が並んでいた。
当人の思いをガン否定である。
「これしかないのかよ、この町は、、」
当人のレントンですら、「恥ずかしくて帰れない。」と嘆いたのを思い出す。
(あれ、この記憶いたのだっけ、、俺が記憶無くした後だったっけな、、まぁいいか。)
せっかく早く来れたのだから、さっさと目的の知人の元まで行こう、とは言ったものの場所がわからない。
その時、ちょうど目の前をリフを担いだ少年1人少女2人の3人組が通った。

「ああ、ちょっとごめん。」
「はい？」
見るからにリーダー格っぽい癖毛の少女が反応する。
『ガレエジ・サーストン』ってどこかわかるかな？この町じゃ有名なとこだと思うんだけど。」
と、聞くと3人は彼から少し距離を置き、コソコソと話し始める。
終わったと思うと、さっきの子がこっちへ来た。
「ちょうど私たちも行くとこなんで、案内しますよ。」
「そうか、ありがとう。」

「お兄さんってリンクの友達？」
3人の中の短髪の少年が聞く。
「友達っていうか、親戚っていうか、まぁ友達とでも思ってていいよ。」
今度はリーダー格の少女。
「そういや名前聞いてなかったや。なんていうんですか？」
「ユーリ。ユーリ・ノヴァク。」
次はメガネの少女。

「こっちにはなんの用事で来たの？リフボード持ってるけど。」
「あー、、、ちょっと旅をしててね。ここに着く予定だったんだ。明日には出るけどね。」
その後も質問責めに会いながら、ガレヱジ・サーストンへ続く道を歩いた。
ちなみに彼女らの名前は、リーダー格の子がシエラ、メガネの子がメイ、男の子がカイル、というらしい。
聞くところによると、彼らはほぼ毎日ガレヱジ・サーストンに通い、リンクにボードの稽古をつけてもらっているようだ。
リンクもこの町では有名なリフボーダーで、『波呼びのリンク』という2つ名まで付いていた。
なんでも、あまりいい波が来ない場所で大会が行われても、彼が登場した途端、とてもいい波が来て、その後も大会を盛り上げたそう。
しかしながら、彼は彼で機械いじりが性に合っているらしく、最近では滅多にリフ大会などで見かけなくなったそうだ。
質問が切れたあたりでちょうど、目的地に着いた。
三人衆が走って報告して来てくれるそうだ。
「おーい、リンクー！遊びに来たってのと、お客さんだぞー！」
「だーから、年上を呼び捨てにすんなって何度言えばわかるんだ。あと客って誰、うん

？」

黒人系の青年が、ユーリを見る。

工具を持ってるあたり、作業中だったようだ。

「久しぶり、リンク兄さん。」

「おー、ユーリじゃん！あれ？２日３日早くない？ま、いっか。とりあえず入れよ。」

バイクが入れるようにシャッターを開ける。

「そのバイク見てやるよ。こっち持ってこい。」

「えー！リフの練習はー!?」

「あとで見てやるよ。それよかこっちだ。外でてろ、ほら。」

「ちぇー」と、それぞれ文句を言って外に出る。

「久々だなーユーリ。お前が入院してた時以来か。それより、このバイクどうだ？俺の最高傑作なわけだが。」

「うん。スピードも出るし、雪道もダートもちゃんと走るよ。」

「そっか、それは良かった。こっちは俺やってるからさ、お前外のチビの相手してこいよ。リフうまいだろ？」

「いやぁ、最近乗ってないからさ。」

「大丈夫だって。お前のリフテクは親父の折り紙つきだったろ？」

バイクに着いてたリフボードを渡される。
「そうだっけ、、」

「おーい。」
「あ、お兄さん！もしかしてリフ教えてくれるの？」
「うん、リンク兄さんの代わり。」
久々に波に乗った。
といってもここじゃロクな波はこなかったので、軽く浮いて慣性の赴くままに滑るだけであった。
「まぁこんなもんか。」
「えー？そんだけ？俺たちと変わんないじゃん。」
「そーだよ！私たちもっとカッコいい技を決めたいの！」
「って言われてもなぁ、、よし。風読んでくる。」
空に向けて手をあげる。
こうするとトラパーの波が読めると教わった覚えがある。
記憶を失い、途切れ途切れのわずかに残った記憶だった。
「あっち、、かな。そんな気がする。リンク兄さーん！ちょっと遠いとこまで行って来

るよー。」
「おーう。迷子なんなよー。」
ユーリは３人をリードし、トラパーの波を読んだ場所まで走って行った。

続く

白い記憶

「リンクほどじゃないけどお兄さんリフうまいね。」
「俺も久々だったからあれだけ滑れたことにびっくりだよ。」
リンクの代わりに稽古をつけたユーリは3人組と町のクレープ屋で休憩を取っていた。
日はすっかり傾いていた。
「ごちそうさま！ありがとうね！」
「うん。じゃあね。」
3人組が帰路につき、ユーリは彼らを見守ってガレヱジ・サーストンへと戻る。
「おかえり、あれ？チビ三人は？」
「もう遅いし帰したよ。」
「そうか、、バイク直しといたぞ。」

このガレヱジ・サーストンには今ではリンクしかおらず、食事は男臭い料理（味は普

通）が並べられ、酒が入ったリンクはユーリとの昔話を始めた。もちろん、ユーリの記憶にはない。

しかし、時間が経つにつれ、昔話から逸れただの愚痴となって行った。

「親父もお袋も今いないし、モーリスなんて電話すら寄越さねぇし。ヒック。連絡つく元ガッコーステイトもタルホさんくらいだし。メーテルに限っては最近こんなもん送りつけてきやがったんだ!!」

ドン!とテーブルに叩きつけたのは写真だった。

２０代後半くらいの女性、メーテルと、見知らぬ男性（優しそう）が写っていた。

写真の下には「私たち結婚しまーす!」と書いてあった。

「あいつ!親父やお袋になんも言わず勝手に決めやがったんだ!モーリスには多分届いてないし、多分今届いてんの俺だけだぞ!?」

「おれも母さんからは何もなかったよ。」

「しかもこれ、送ってきたとこ見てみろよ!結構遠いんだよ!くそう!会ったら親父に代わって一発ガツンと言ってやる!」

次の日、ユーリは出発するために町の出口に向かっていた。

「また寂しくなるよ。なぁ。旅が終わった後でいいから、ちょくちょくこっちに寄って

きてくれないか？家が静かで寂しいんだ。」
惜しそうにリンクは言う。
たしかに、両親はもちろん、兄弟のモーリスやメーテルもいないで、1人あそこに住むのは寂しいことだ。
「でも、あそこを離れるつもりはないんでしょ？」
「当たり前だ。ひいじいちゃんの店、潰すわけにはいかねぇ。」
「ならさっさとお嫁さん貰った方が早いかもね。母さんが紹介してやりたいって前言ってたよ。」
「嫁ねぇ。メカのこと分かってくれる人がいいな。ま、嫁なり彼女なり見つかるまでは寄ってくれよ。」
「うん。じゃあ行くよ。」
「ああ。気いつけてな。」
晴れた空に白銀の道をオフロードバイクで走り抜ける。
この旅のターニングポイントまではもう少しであった。

続く

エントランス・オブ・ジ・アース＆ａｍｐ；地球層第３都市

この旅の折り返し地点。
「『エントランス・オブ・ジ・アース』、、」
およそ１００人を乗せられる超大型ゴンドラが地中に潜り、下層の地球区域の人々の出入りをさせる。
ユーリ乗ったことはないが、聞く話によると、下には海という大きな塩水の湖が広がっており、ゴンドラから上を見あげると、空からワイヤーが出て来ているような、幻想的な景色が見えるらしい。
ちなみにリンク兄さんは見たことあるようだ。
「すみません。バイクを載せていきたいんですが。」
「では、あちらの列に並ばれてください。料金はこちらになります。」

ちょうどユーリが着いたタイミングが、ゴンドラが出発したところだったので、かなり最前列に近いところで並べた。

列もそこまで混んでおらず、次のゴンドラ（と言っても２時間後）に乗れることになった。
「飯でも食うか、、」
もちろん列んでる途中なので調理などはできない。
だから、前の街で予め作っておいたサンドイッチをバイクのサイドバックから取り出す。
食べ終わってしばらくしての事だった。
「あんた、旅人さんかい？」
呼ばれた気がして、振り返る。
そこには高身長だが、少し痩せていて、ユーリより少し歳上の青年が立っていた。
列には並ばず、整列ベルトの外にたっていた。
「はい、そうですが。」
「そうか。少しお願いしたいことがあって、、その、この手紙を届けてほしいんだ。僕の大切な人に、、」
ユーリはこの人の目を知っていた。自分の目と似ている、そう思ったのだ。
「いいですよ。ただ、中身を確認していいですか？」
「ええ!? 中身を、、？それは、、」

「麻薬とか、やばいものだったら嫌なんで。」
「あ、ああ。そうか。そうだよね。うん、いいよ。でもちゃんと紙だけだから、大丈夫だよ。」
その中はもちろん紙だけだった。
「失礼しました。じゃあこれ、どこに送ればいいですか?」
「地球層第三都市なんだけど、もし行き先に被らなかったら、他の人に頼むよ。」
「大丈夫です。ちょうど突っ切る予定でしたので。じゃあこれ届けますね、必ず。」
「ッ!!ありがとう!」
この会話が終わると同時にゴンドラが来た。
「君の旅が上手くいくことを願うよ。気をつけて。」
ゴンドラの轟音と、トラパーの波にゴンドラが乗る音が響き、ユーリは地中へ降りて行った。

地球層第三都市にはエントランスジアースからおよそ3日かかった。
「ここ、、、だよな。多分。」

エントランスジアースの上の乗り場で渡された手紙の住所に来たユーリ。
インターホンを押してしばらくすると初老の女性が出てきた。
「えっと、なにか御用？」
「は、初めまして。マルダー・アスラズさんから手紙を渡されて、これです。」
「そう。マルダーからってことは上の層から来たのね。遠いところありがとう。あなたはマルダーのお友達？見るからに宅配さんではなさそうだけど。」
「旅してるんです。マルダーさんとは三日前に初めてあっただけで。」
女性は懐かしむように手紙を眺めていた。
「あら、ごめんなさい。疲れてるでしょう？上がってって。」
たしかに3日間バイクで走り続けてたユーリはヘトヘトだった。
だからつい、その言葉に甘えてしまった。
「すみません。お邪魔します。」

中は綺麗に整頓されていた。
女性の名前はノワ・スコールと言ってマルダーとの関係は娘の友達だそうだ。
ユーリも自己紹介を終えた頃リビングに着き、「少し待ってね。」と言われ、リビングの椅子に腰をかけた。

「待たせてごめんなさい。はい、お茶をどうぞ。」
「ありがとうございます。」
「ほんと、久々のお客様だわ。娘と二人暮しなんだけどね。娘とももう何年もまともに話せてないわ。」
「え、、、どういうことですか?」
「病気なのよ。トラパー粒子を吸うと発作を起こしてしまうの。だから2人だけでトラパーの薄いここに引っ越したの。でも、あの子が意識を失ってもう2年。ずっとここにいるの。」
「そう、、なんですか。」
「ありがとう。マルダーの手紙を届けてくれて。この手紙、たまに届くんだけど、それが私の心の支えになってるの。まぁ、ほとんど娘宛に書いてあるんだけどね。」
そのあともユーリとノワは会話をし、日が沈んだ頃にユーリはその家を出た。

家を出る際にノワから安い宿を聞いたので、今日はそこに泊まることにした。
三日間の野宿はユーリの体を疲れさせていて、久々のベッドにユーリは安堵する。
考える事は色々あったが、ユーリは今だけはこの安堵に浸っていたかった。

つづく

旅の終点

地球第三都市をでてからは早かった。
次々と街はすぎていき、気付ば終着点だった。
「ここが終点、、」
実感のわかないままユーリは町へと入っていった。

町は陸の端という感じで入り口以外は全て海に囲まれた小さな街だった。
既に日は傾き、ちょうど日の沈む向きにある丘が綺麗に見える町だった。
町に入ってすぐの浜に大きなスピーカー付きのＬＦＯがあった。
見てみれば年の近そうな男一人と女一人の３人組がいた。
「すみません！聞きたいことがあるんですけど！」
呼んでみると男の方、チャラそうな見た目の彼がこっちを向いて答えてくれた。
「はーい？なんでしょー？」
と言ってわざわざこっちまで来てくれた。
「見ない顔っすね。旅人さんすか？こんな所まで珍しい。」

「ちょっと人に会いに来てですね。えっと、セイレン・ホークスって人を探してるんですけど。」
「セイレン・ホークス？知ってますよ。つーか、俺らセイレンの友達っすよ。」
と、早速の大当たりだった。
すると、
「どったのー？」
と、海にいた女の方が来た。
「いや、セイレンの知り合いらしくてな？えっと名前は、、」
「ユーリです。ユーリ・ノヴァク」

ユーリは上の層の地域からここまで旅をしてきたことを説明した。
すると2人はユーリから少し離れ、ユーリに聞こえないように話した。
「どーするのよ。」
「セイレンの家教えるかどうかをか？」
「もし変な人だったらやばいじゃん。ストーカーとかさ。」
「いやでも、話聞いた感じも見た感じも、悪いやつじゃなさそうだが、、」
「話しや見た目で判断しちゃダメでしょ。じゃあなんでセイレンの知り合いならセイレ

ンは私たちに話さないのよ。」
「あいつ、元から大して自分の事喋んねーだろ。」
「とりあえず探りを入れる必要がありそうね。」
と、決定した所で女の方がズカズカとユーリの方に近づいた。
「初めまして。私はシャロー。で、こっちが、、、」
「おれはグーフィー。よろしくな。」
「ユーリさん、セイレンに会う前にあなたのこと少し調べさせて貰うわよ。」
「はぁ、、、」
「すまねぇな、おれはそうは思ってねぇけど、友達の事だからな。ちょっと付き合ってもらうぜ。」
「わかりました。まぁ突然来ても不審なだけですもんね。」

連れてこられたのは浜にあるＬＦＯの隣、コンテナの家だった。
どうやらグーフィーの家らしく、窓がついてたりそれなりにリフォームされていた。
「ここ座ってくれ。尋問はお前に任したからな。おれは茶でも入れるよ。」
「尋問って、、物騒な言い方しないでよね。」
シャローはユーリと机を挟んでこっちを向くように座った。

どっから見ても尋問だった。
「じゃあまず一つ目ね。あなたはどこからどうやってここに来たの？」
「トーギーっていう町からあそこにあるバイクで。大体二ヶ月弱くらいかかった。」
「んーじゃあ二つ目。セイレンにはなんの用で会いに来たの？」
「おいおい、いきなりかよ。探りもなにもねぇじゃなぇか。」
「し、仕方ないでしょ？探り入れるにもなに聞けばいいかわかんないし。で、なんの用があったの？」
シャローの隠す気のない探りにグーフィーがツッコミを入れる。
そして、シャローの質問にユーリは口を噤んでしまった。
「言えない？なら、あなたにセイレンの居場所は伝えられない。私たちは、あなたをここから追い出すことだってできる。」
「いや、そんな事じゃない。ただ、、」
「ただ？」
「ただ、おれは彼女に謝りに来ただけなんだ。おれは、、彼女に悲しい思いをさせてしまったから。」
「それだけ？」
コクリとユーリは頷いた。

「それが終われば明後日にはここを出るつもりだ。そのまま第7都市の飛行場に向かって上に帰る。」

グーフィーとシャロー、2人だけ外の浜に出た。
日は既に沈んでいて、コンテナの火があたりを照らしていた。
ユーリはコンテナの中にいる。
「さっきの話、本当なのかしら。」
「本当だろ。あれは嘘をついてない男の顔だぜ。」
「なにそれ。意味わかんないよ。」
数分の間、二人の間で漣の音が響く。
「セイレンの家、教えてもいいかな。」
「いいんじゃねーの？少なくとも悪いことするようなやつでは無さそうだからな。おれが明日教える。お前はもう帰れ。」
「セイレンにこのこと教える？」
「それも明日あいつから聞こう。」
「分かった。じゃああたし帰るね、おやすみ。」
「おう、また明日な。」

ユーリはグーフィーのコンテナハウスに泊めてもらうことになり、旅の疲れを癒すために寝ようとしたが、眠れなかった。
コンテナハウスの中はただ無闇にグーフィーのいびきが響くだけだった。
翌朝、最初に声を掛けたのはグーフィーだった。
「おう、寝れたかって、、その顔は寝れてなさそうだな。ソファ寝心地悪かったか？」
「ううん。なんで寝れないか分からないくらいいいソファだよ。」
「そうじゃねぇよ、分かれよ、、まぁいい。朝飯どうするよ、カップ麺ならあるけど。」
「ありがとう、いただくよ。色々お世話になって、なんかごめん。」
気にすんな、とぶっきらぼうにグーフィーは返し、カップ麺の準備をする。
朝になって明るくなり、昨日気づかなかってことにユーリは気づく。
リフボードより大きい、人が乗れる大きさのボードが何枚か立てかけてあった。
「ねぇグーフィー。このボードは？」
「ん？あー、これはサーフボードだよ。知らないか？リフボードの元になったスポーツのボードだよ。」
「へぇ、おれこんなの初めて見るよ。」
「そうか。と、カップ麺出来たぞ。」

「で、セイレンの居場所なんだけど、、」
「おっと、待った。」
　先を急ごうとするユーリを止めるグーフィー。
「出なきゃ行けないのは明日だろ？ちょっと男２人で話でもしてこうぜ。」
「話って、、何を話せばいいんだよ。」
「そりゃお前とセイレンの事だよ。お前が何をセイレンに謝るのかもな。なに、男２人だけだ、恥ずかしがるこたぁねぇよ。」
　ユーリは少し考え、口を開いた。
「分かった。と言ってもそんなに話せることは多くないよ。」
　おう、とグーフィーは優しく答えた。
　グーフィーはユーリの話すことを、どんなことであっても受け止める体勢だった。
「おれとセイレンは、かなり親しい仲だったらしい。」
「らしい、、、」
「おれは記憶を無くしてる。爆発に巻き込まれてそうなったらしい。」
「なるほどな。で、なんで今こんな状況になったんだ？」
「彼女がおれの病室に入ってきた時、『君は誰？』って言って、それが元凶。それ以来、い

や、おれからは最初って感じなんだけど、全然話さなかってさ。」
　グーフィーは黙って聞いていた。
　頷きもせず、ただじっとユーリの顔を見て話を聞いていた。
「退院した後、お詫びのつもりで花を贈ろうと思ったんだ。ベタだけどね。どうもそれがトドメだったらしい。
　記憶を失う前のおれが贈った花と全く同じだったらしくてさ、、、
『ユーリじゃないくせに!』だとか『ユーリの真似をしないで!』とかさ。酷いもんだろ？まったく。
　それでそのあとは、セイレンの親の仕事の理由で地球層の、それもこんな端の所まで引越しちゃってさ。」
　ユーリは1度息を整えて、また話を始める。
「でも、わかる気がする。おれも親しい人に、誰？なんて言われたら悲しい。だから、おれはセイレンのその事を謝りに来た。」
　これで俺の話は終わり、とユーリは話を切った。
　しかし、
「それだけか？」
　グーフィーはユーリに問いた。

「え？」
「謝りに来ただけかよ、って聞いてるんだ。」
「そうだよ。そう言ったろ？謝ってそれで帰る。それでいいんだよ。」
「いや、良くねぇな。」
「何が良くないんだよ。」
「良くねぇ。なぜならお前がお前に素直になってねぇからだ。」
　ユーリは口を噤んだ。
「謝罪がどーだのなんだの。そんなん言い訳だろ？でもその様子じゃ、そっちの覚悟が着いてねぇ感じだな。」
「無理だよ、おれは。記憶を無くす前のおれじゃないから。それにこれ以上、彼女はおれと関わりたくないだろうし。」
「んなもんどうだっていいんだよ。当たるだけ当たっとけって話だよ。その結果の善し悪しは置いといてよ。じゃなきゃ後々後悔するぞ。」
「そんなのただの自己満足だ、、、」
「ああ、そうだな。でも、お前がここまで来て謝りに来たってのもお前の自己満足だろ？」
「それは、、、」

「結局、おまえはセイレンのためだとか建前で、自己満足のためにここまで来たってわけだ。じゃあ最後までお前の自己満足をぶつけろよ。ユーリ。」
正直当たりだった。
だが、その気持ちはユーリは元々伝えるつもりは無かったのだ。
「そうだよな、うん。そうする。それのあとはよろしくな、グーフィー。」
「おう、任せとけ。」

日が沈む前、シャローに頼まれ、セイレンを岬の公園に呼ばれた。
「シャローったら、こんなとこ呼び出して、、この間言ってた技でも完成したのかな。」
しかし、いつも2人がサーフィンをしている浜には人影ひとつなかった。
すると公園の入り口からバイクのエンジンが聞こえ、振り返った。
バイクから降りた人物はセイレンがよく知った人物だった。
「えっと、その、、久しぶり。」
時が止まったように公園は静まり返った。
「なんで、、なんでここに居るの、、？」
「謝りに来たんだ。いくら記憶を無くしたからって君に悲しい思いをさせたことを。」
「それは、、それは私が悪いの。担当医の先生からも後遺症は何が残るかわからないっ

て言われてたのに、、私は高望みしすぎたんだ。
だからその話はもういいの、私の中ではもう完結したことなんだから。
でも、わざわざそれのためだけにここまで来てくれたんだね。ありがとう。
でも、もう私たちの間にはそれ以上の関係は無い。全くの赤の他人だよ。」
「それだけじゃない。それだけじゃないんだ。旅の途中、いや、君と離れる前までに気づいていたはずなんだ。今日はその事を伝えに来た。」
下を向いていたセイレンの顔が上がりユーリを見た。
「おれは、君が好きだ。これは前のおれの記憶の残りじゃない、真似事じゃない。今のおれの気持ちなんだ。じゃあ。」
そう言ってユーリは公園から出て行った。
バイクのサウンドがすぐそこの坂を下って行った。
「何よ、、それ。」

翌朝、2日もグーフィーのコンテナハウスにお世話になったユーリは、荷造りを済ませ、今にでも出られる準備をしていた。
グーフィーとシャローの2人がユーリを見送りに来た。
「ありがとう。グーフィー、シャロー。お世話になりました。」

「うん。旅の目的達成おめでとう。ユーリ。元気でね。」
「じゃあな、ユーリ。で、昨日聞き忘れたが、あっちの方は上手くいったのか？」
「うん。その件もありがとう、グーフィー。お礼を言っても言い尽くせないよ。あ、もう時間だからそろそろ出るよ。本当にありがとう。さよなら。」
そう言ってユーリは、町を出て証明と舗装された道路しかない平野をバイクで駆けた。
ユーリを見送り、２人だけになったとき、シャローがグーフィーを見た。
「何よ、あっちの方って。」
「ああ？んなもん決まってんだろ。告白だよ、告白。」
「ええ!?ユーリってセイレンに謝りに来ただけじゃないの!?で、返事は？」
「んー？ダメだったんじゃね？いい返事なら出てったりしねぇだろ、多分。」
あー、そっかー、、とシャローが嘆いき、項垂れる。
「何、お前２人がくっつけばとか思ってたのか？最初は危険人物扱いしてたくせに。」
「いやぁ、せっかくバイクで走ってここまで来たのに、なんか報われないなぁって思っただけ。」
「報われる報われないはあいつの決めるこったろ。それに、誰かに忘れられた方の気持ちも考えたらそうなんだろ。

さて、サーフィンでもしようぜ。この間言ってた技でも練習しようや。」
「そうだね。」

『おれは君が好きだ。真似事なんかじゃない。』
「何よ、、、それ、、っ！」
セイレンは勢いよく毛布を持ち上げ、あーもう！と叫び、出かける準備をし始めた。
そして、急いでリフボードを手に取り、家を出る。
浜より高い位置にある家から、下り坂をリフボードで駆け抜けた。
浜につくや否や、今からサーフィンでもしようとしていたグーフィー達を呼び止めると、
「グーフィー！ＬＦＯだして！」
グーフィーはそれだけで全てを察し、ニヤリと笑った。
「あいよ！」

「これ、、、あたしいる？」
後部座席にセイレンと共に詰め込まれたシャローが言う。
「シャローには前科があるからね。これぐらい付き合って貰わないと。」

「えええ、、」
「で、あいつの乗る便までに着いたとして、何をどうすんだよ?」
「昨日の返事をするだけ!それだけでいい。」
「まぁ今でも間に合うかどうかわかんねぇけどな。よし、とばすぞ!」

　昼頃、飛行場にはユーリの乗る便のアナウンスが響いていた。
「旅が終わったんだなって自覚ないな、、」
　建物の中から出て、乗る飛行機のタラップの前に並んでいた、その時だった。
『そこのＬＦＯ!止まりなさい!』
　と、アナウンスとサイレンを鳴らした警備車両が、見覚えのあるＬＦＯを追いかけていた。
「あれって、、グーフィーのＬＦＯか?なんで、、」
　ＬＦＯはスピーカーをこっちに向ける形で停車し、コクピットからついさっき別れを告げた２人ともう１人、アリアが出てきた。
　グーフィーとシャローの２人はＬＦＯから降り警備員に頭を下げたりしていた中、セイレンはマイクをおもむろに持ち、叩いてチェックをする。
『あーあー、えっと、、あー、いざって時に恥ずかしくなってきちゃった。どうしよう、

グーフィー。』

「ああ!?うるせぇおれに聞くな!思ったこと言え!」

タラップに登る途中の乗客も、窓側の乗客も、突然来たＬＦＯとマイクを持ったセイレンに注目していた。

注目の中、セイレンは、おほん。と間を開け話し始めた。

『えっと、思ったことをそのまま言いたいと思います。

ユーリ、数ヶ月掛けてここまで来たのは、正直以外だった。だって、私はあなたとあの日に完全に決別したつもりだったから。』

あの日。ユーリが旅の途中、何度も夢に出たあの日。

『でも、あなたは来た。それもその時の謝罪とあの日あなたに酷いことを言った私を、、好きだっていうことを伝えるためだけに。』

『嬉しいのかどうか分からなかった。あの日あなたに言ったように、あなたは私の知ってるユーリじゃないから。』

『私の知ってるユーリは、私の好きだったユーリ死んだの。私たちを街ごと守った時に。』

『なのにね、あなたにユーリの姿だとか癖が重なるの。分かる?これってとっても辛いのよ。』

『ねえ、ユーリ。あなたはこの隙間を埋めてくれる？』
アリアの問い掛けへのユーリの答えはたったひとつだけだった。
「ああ。埋めてやる。それくらいおれは君が好きなんだ！」
ユーリは列を抜け出し、セイレンの元へ走り出した。
アリアはＬＦＯから降り、正面に立った。
「ねえ、ほんとに私でいいの？」
「ああ。」
「この隙間を埋めてくれる？」
「ああ。むしろ埋めた上でもっと盛ってやる。」
ユーリはセイレンの手をとる。
「半年後、必ず君の街に行く。それまで待っててくれるか？」
「うん。待ってるね。」
「ありがとう、じゃあまた。」
そう言ってユーリは飛行機へ向かった。
飛行機は飛び立ち、地球層から出ていった。

―――――半年後―――――

地球層の端の街に、バイクのエンジン音と共にユーリが訪れた。
浜辺にはＬＦＯとコンテナハウス。
海の方を見るとサーフィンをしている３人がいた。
ユーリはバイクを道路脇に置き、３人のいる方へ走った。
それに気づいたセイレンはユーリの方を向き言った。

「おかえり。」

ユーリは笑顔で言い返した。

「ただいま。」

――END――

エウレカセブンＡＬ　過去編

０１

「こちらイーネン、５０５出撃する。」
前に並んでいたターミナスＭａｒｋ　ｃ５０５がカタパルトから射出された。
艦の揺れが操縦桿を伝って腕がビリビリと痺れる感覚。リベイル洲連合軍のＶＣＯがレーダーに表示される
『ユーリ。出撃準備完了です。』
「了解。９０９トパーズ出撃します！」
タイヤのすり減る音を立ててトパーズが空中に射出された。
ビークルモードから高速飛行形態になり前のＬＦＯを追いかける。
その後ろでステラの８０８が続いて射出され、リーダーのダイスケ・エイケンを先頭にＬＦＯ４機でＶＣＯを迎え撃つ。
『敵ＶＣＯはおよそ５機。ミサイル射程距離まであと５マイル！』
「気い引き締めて行けよ、お前ら！」

ダイスケが掛け声を挙げ、全員が答える。
敵射程距離に入り、ＶＣＯ肩装甲のホーミングミサイルが発射される。
散会し、フレアを炊く。
トパーズの背中のレーザー砲ですぐさま反撃に移る。
レーザーはＶＣＯの足を吹き飛ばし、浮力を失う。
こうなれば撤退しか出来なくなる。

これが「不殺のシンゲツステイト」のやり方である。
他のメンバーも迎撃し終わり、シンゲツ号に戻ろうとしていた。
『こちらダイスケ、戦闘終了。これよりシンゲツ号に帰還する。』
『了解、お疲れ様でした。』
これがシンゲツステイトの日常である。

出雲財団人型コーラリアン救出非営利団体、シンゲツステイト。
リーダーのダイスケを筆頭とするＬＦＯライダーを乗せた組織である。
保有するＬＦＯはターミナス型。Ｍｃ９０９トパーズ、Ｍｃ３０３、Ｍｃ５０５、Ｍｃ８０８の４機。

「ＬＦＯ全機のメカメンテナンス終わったよ。アレンの方はまだ掛かるって。まぁ、作戦までには間に合わせるよ。」
オイルだらけになったメカニックのゲイツが操縦室に戻り報告に来た。
アレンとはソフトウェアメンテナンス担当しているエンジニアである

「おう、お疲れさん。飯でも食ってこい。」
返事をするダイスケは、パネルのはめられた机に向いて、次の作戦を立てていた。
「ゲイツさん、食堂に行くついでにライダーをここに来るように連絡してください。」
そう言うのは同じく机に向く元塔洲連合軍作戦指揮官のフローレンス・プライス。
元軍人らしい背筋のピンとした彼女とは逆に、ゲイツはだらしなく返事し、操縦室を後にする。
「という訳で私はこの迂回ルートを薦めます。」
そう言ってフローレンスがパネルに指を指す。
「どう思う？ツーリカ。」
「この最短ルートじゃだめなの？」
別意見を出すのはツーリカ・ヤック。シンゲツ号操縦士だ。

「確かにそのルートなら早くは着きますが、、」
フローレンスの案にツーリカが納得したところで、ユーリ、イーネン、ステラの３人が操縦室に集まった。
「ライダー全員集まりましたよーっと。」
ユーリが報告するとフローレンスは３人に向き言った。
「これより作戦をお伝えします。」

ＬＦＯで搭乗待機を命じられたユーリは、愛読誌の「Ｒａｙ＝Ｏｕｔ」を読んでいた。
『また出撃前にそんなものを読んでいるのか。』
ため息混じりに合成音声がコクピット内に響いた。
ターミナスではこのＭｃ９０９にだけ搭載された、ＬＦＯライダー補助人工知能。
個体名トパーズと呼ばれるものだ。
「うるさいなぁ。精神統一だよ、精神統一。
これ読んで心を落ち着かせて、出撃する。さっきの戦闘も上手くいったろ？」

ため息をつくトパーズ。
よく出来たＡＩだ、とユーリはよく感心する。
しばらくするとＬＦＯ全機に通信が入る。フローレンスからだ。
『まもなく作戦開始地点です。各機発進準備にかかってください。』
よし来た、とライダー達は次々にエンジンを始動させ、開き始めたカタパルトにダイスケ、イーネン、ユーリ、ステラの順番に並ぶ。
『これより人型コーラリアン救出作戦を開始します。敵はリベイル洲連合軍、ハンドリー基地。』
先頭のダイスケから発進合図を出して出撃する。
「９０９トパーズ出撃します！」

――――――続く――――――